



# 長島昭久

内閣総理大臣補佐官

昨年秋のことだ。トランプ氏がアメリカ大統領選で勝利し、石破茂首相が会いたいと申し入れ、断られるひと幕があった。メディアの多くがこれを石破外交の失点と取り上げ、またかつての安倍晋三元首相とトランプ氏の蜜月と比較して「石破首相で大丈夫か」とまで報じた。だが、水面下で日米外交の知られざる交渉が行われていた。じつは、同時期に訪米し、トランプ陣営と接触していたのが、石破政権の外交戦略のキーマン・長島昭久内閣総理大臣補佐官だった。長島氏に、日米首脳会談の舞台裏と今後の外交戦略を聞いた。

過剰なくらいの厚遇だった  
しかしまだ1回の表

―― まずは、2月上旬に行われた初めての石破・トランプ会談をどう総括しているか。

長島 正直、トランプ大統領が何を言うのか分からない状況でした。それに一抹の不安はありましたが、サブライズや予想外のことはひとつもなかったのはよかったです。事務方としては、非常にいい準備ができました。また、アメリカによる日本への対応は、過剰なくらいの厚遇だったと思います。お互いもう一度会おうという感じになりましたし、われわれとしては安堵しました。

―― 長島さんは11月に訪米してトランプ陣営と話を詰め、帰国してからは首脳会談にどう臨むか中心になって戦略を立てたと聞いている。

長島 考えたのは積極的な提案です。具体的には、2027年度以降も防衛力を強化していく方針を伝えたこと。27年までは現行の防衛関連予算を2倍にして継続的に強化していきます。これは決まっている。その先も安全保障面での協力を続けていく

## 「日米首脳会談で大事にしたのは積極的な提案」

方針は伝えようと思いましたが。

―― 金額だとかの話ではなく。

長島 方針です。かつてのアメリカは世界の警察と言われ、持ち出しを多くしてまでそれに徹してきましたが、結果的に自分たちの国力が疲弊してきた。トランプ大統領を支持するMAGA (Make America Great Again) の人たちはどう考えていて、トランプ大統領自身も強い同盟国とは協力するけど、弱い同盟国は遠ざけるという姿勢です。

そうした姿勢はトランプ大統領だけではなく、米国はこれまでも一貫しています。かつてはキッシンジャーも台湾を切り捨てている。歴代大統領も表現こそ変えているけど、その本質は変わらないわけです。今回日本が今後も長く防衛面での協力を示したことで、アメリカから見れば強い同盟国、頼りになる同盟国だと認識されたんじゃないでしょうか。

―― 特に経済についてはさまざま提示をしたようだが。

長島 アメリカに対して1兆ドルの投資を提案しました。ネットを中心に、まるで政府が出すかのような言説もありますが、民間による投資です。現在でも8千億ドル規模に達していますから、正直1兆ドルはそこまで大きく出た数字ではないんです。ただ、区切りのいい数字で提案ができたと思います。

他にも重要なのはLNG (液化天然ガス) について。今回、日本はアラスカに北部の天然資源に関する共同事業への参加や輸入も提案しました。

このように積極的な姿勢を示したことが功を奏したと思います。とはいえ、野球に例えるならまだまだ1回の表を終えたばかりです。―― 敵の攻撃を何とか防いだというところ？ まだまだこれからだと。

長島 そうです。特にこれからウクライナ戦争を終えていく過程で、G7の結束が重要でしょう。日本はヨーロッパとアメリカの板挟み状態です。この場面で、どう発言をしてくか。ここでの振る舞い、発言が今後の日本の安全保障面における存在感にも関わってくるでしょう。

### 欧州と米国の板挟み状態で中国との距離感も見極める

―― 岩屋外相は国際会議の場でウクライナ支援を継続すると発言した。トランプ大統領に全面的に同調せず独自の姿勢を示した。

長島 そうですね。実際、現在日本が行っているウクライナへの戦争そのものへの支援はほとんどない。経済的、人道的支援に限られており、兵器を送っているわけじゃないのです。ですから、そういう意味で言うと、やはり復興支援の面ですっかり

やる姿勢を見せることが、日本としては一番バランスのいいやり方じゃないかなと。

また、アメリカは停戦監視や平和維持をヨーロッパがやれと言っていますが、日本も自衛隊を送るのかどうか、ここは難しい判断になると思います。そういったことも議論することになるでしょう。NATOやIP4 (日、豪、ニュージーランド、韓) などとの関係も考えながらの決断になると思います。

―― NATOについては岸田政権時代に関係を深めた。日本がトランプ氏に近づきすぎるとせつかくのNATOとの関係もこじれる。

長島 例えば、今後アメリカとヨーロッパの関係が離れていけば、中国などはもう一度ヨーロッパに接近しようとするでしょう。日本が、アメリカと一緒にあってヨーロッパから距離を置くようなことになれば、それを促進することになります。

日本はうまくアメリカ、NATO両方とのバランスを取って動かないといけない。発言の中身、仕方、タイミングなどで知恵の使いようです。―― 中国との関係は。

長島 中国外交は気を付けたいといけないと思っています。アメリカと首脳会談が終わったから、じゃあ次は中国だという意見も政府の中になくもないですが、ここは慎重になつたほうがいい。急いで首脳会談をする必要はないと、私は思います。

アメリカが今後どういうアプローチをするかトランプ大統領の本心は分からない。来年の11月にはアメリカで中間選挙があり、その近辺でAPECが中国で開かれます。そこまでの長い視点で、米中関係を見極めながら、日米、日中関係を組み立てていくべきです。日中間では解決しなくてはいけない問題が山積みです。拘束されている日本人や海産物の輸入の問題とかたくさんあるわけです。これがある程度解決できるめどが立たない限りは、急いで中国との関係を取り繕う必要はないと思います。

トランプ氏も朝令暮改。どんな中国外交を展開するのかしつかり見定めないと……

長島 そうですね。トランプ大統領は、選挙期間中に中国への関税は60%とも言っていたのが、実際は10%になっている。いろいろ考えている

んだと思います。日本が焦って中国外交で動き出してしまつと、米中がぐっと寄って日本がしこを外される可能性だってあります。

台湾については。

長島 アメリカは台湾支持に傾いているとは思いますが、じつは今回の日米首脳会談では、今までになかった文言が2つ入っていました。

ひとつは台湾海峡の問題で、「力や威圧による一方的な現状変更は許さない」というもの。今までは「力による」だけ。つまり武力をあくからさまに使ってはいけないよと。しかし、今回は威圧、つまり平時においても圧力をかけてはいけないと明記した。G7の声明の中には入っていませんでしたが日米間では初めてです。日米韓の外相会談の共同文書にもこの文言が入っています。

もう1つの文言は、「台湾海峡の平和と安定を維持する重要性を強調し、兩岸にとって意味のある形で台湾が国際機関に参加することを支持する」というもの。これは普段から日米が言ってきたことですが、共同文書の中に、しかも首脳会談の共同文書に入るのは初めてです。

また、アメリカの国務省のファクトシートで「台湾の独立は支持しない」という文言が入っていたのですが、これがなくなりました。さらに中間問題を巡り「強制」されない平和的解決を求める、とも書き換えられました。これは、例えば中国が台湾を取り囲んでおいて台湾が音を上げて平和的に解決というのはダメだということ。他にも考え抜かれた文言が入っています。

日本にしてみればアジアの安定という意味ではアメリカの姿勢は満額と言つていいですね。ただ、この国務省のペーパーが、トランプ大統領の頭の中に入り、きちつと実行されるかどうかはもう少し様子を見ないと分かりません。

### 安全保障と経済は両輪だけどあくまで基盤は安全保障

トランプ氏について、安全保障はあまり得意ではないという見方もある。石破首相の一丁目一番地は安全保障。この辺りを日米外交の交渉の道具として使えないか。

長島 もちろん安全保障と経済は両輪だと思えますけど、どっちが基盤

## 日米同盟関係を強化しながら仲間を増やす

CASという装備品の共同生産プロジェクトが立ち上がっています。これを水平展開、拡大をして、地域の国々との協力をしていけたらいい。

韓国のユン大統領はトランプ大統領へ造船を手伝うと言いました。日本だけではなく、各国がそう考えているんじゃないか。こうした体制を日本が主導していけば、日本は、アメリカにとつては価値ある同盟国になると思います。

岸田政権はリアリズム外交を目指すとした。アメリカは重要な同盟国だが、中国ともヨーロッパともしたたかに現実的に外交を展開していくと。石破政権はどんな外交方針でいくのか。

長島 私も基本はリアリズムだと思います。今、リアルな安全保障環境は本当に厳しい。例えば日本がアメリカと中国とバランスよく付き合うのが理想ですが、今はそういう状況でもない。私は、米中の冷戦は14年に始まったと思っています。ロシア

がクリミアを併合し、南シナ海に中国が人工島をつくり始めたのが14年。これは戦後の国際秩序を根底からひっくり返す話ですから。

そういう構造の中で日本は、「自律」していくべきだと思う。支配や制約を受けずに、自らが動きやすい自由になれる状況を作らなくてはならない。自由にならなければならぬ。そのためには、まず自力をつけること。日米同盟関係を強化しながら、そして仲間を増やすこと。インド、イン

ドネシア、韓国、台湾、オーストラリア、こういう国々です。この前、中央アジアに行ってきましたけど、彼らもロシアと中国に挟まれて大変だと。だから、日本からの支援が来ることを望んでいるんです。そういう自分たちの仲間を増やして、自力をつけて基盤を持つ。仮にアメリカとの関係がギクシャクしそうな場合でも基盤があれば自由になれる。それをつくるのが今後の安全保障では必要でしょう。

石破首相は日米首脳会談へ向かう直前、私に「毅然と話せばいいと言うが、外交はそれでうまくいくかというところではないと思う」と言った。日米関係、さらにはトランプ氏という手強い相手との交渉はそうそう簡単ではないという認識を示したのだ。長島氏は今回の日米首脳会談を成功とか甘い判断ではなく「(野球の)1回を押さえただけ」と表現した。今回は何とか防いだけ。トランプ大統領は次々と何をやってくるか分からない。長島氏は補佐官という立場こそ「動きやすい」と言う。今後もキーマンとして石破外交の戦略を水面下でしたたかに描くその役目が期待される。



聞き手=鈴木哲夫  
ジャーナリスト

すずきてつお 1958年生まれ。フジテレビ政治部、日本BS放送報道局長などを経てフリー。30年にわたって永田町取材、豊富な政治家人脈で永田町の人間ドラマを精力的に描く。テレビ・ラジオでコメンテーターとしても活躍。近著に『ブレる日本政治』(ベストセラーズ)、『政治報道のカラクリ』(イーストプレス社)など。

ながしまあきひさ 自由民主党衆議院議員。現在、内閣総理大臣補佐官(国家安全保障等担当)。1962年、神奈川県生まれ。慶應義塾大学法学部(法律学科、政治学科)卒業、同大学院(憲法学)修了。その後、米国ジョージタウン大学(国際関係論、国際経済学)修了。石原伸晃公設秘書や東京財団(現:東京財団政策研究所)にて主任研究員を務め2003年初当選。以降、防衛副大臣、衆院安全保障委員長など歴任し、現在8期目。

